地の人へ、風の人へ。
浅間北麓じまんマガジン

きたかる

2016年
夏になったら、もう秋だ号

Since 2010
VOL.5

表紙の人・降籏大輝さん

お山のふもとにお嫁においで♪

「もしも～この森で、君の幸せ、見つけたら～～♬」 往年の名曲の設定を海から山へもじりつつお届けする今回の話題は、ずばり「LOVE♡」。去る5月、長野原町主催「花マメンズ・プロジェクト」チームによる婚活イベントが北軽井沢で開催されました。「花マメンズ」とは、特産の花豆のように、寒冷な高地で逞しく育った地元男性のこと。行政が行なう婚活イベントと聞くと型通りのお堅いイメージがありますが、こちらのプロジェクトはひと味違います。出会いを求める彼ら自身がイベントを作る側になり、半年ほど前からミーティングを決行。地元女性の意見も聞きつつ、この場所ならではのもてなし方についてアイデアを出し合いました。受け身ではなく、出会いは自分たちで掴みに行く！ その熱意の甲斐あって、女性参加者も当初の想定数以上に。町役場に勤める降籏大輝さんも、立ち上げからのメンバーの一人。決戦当日、「思った以上に盛り上がっています！」と凛々しくキメてくれました。「『婚活』と構えずに、豊かな自然を楽しんで、また遊びに来ようと思ってもらえたらいいですね」。イベントは今後も趣向を変えて継続予定。一見シャイ、でも中身は骨太。自然好きな独身女性の皆さん、そんな彼らの胸に飛び込んでみませんか!?

PROFILE : DAIKI FURUHATA
川原湯出身。大学から東京に出て、フリーターのち広告代理店に5年間勤める。30歳になるタイミングで地元に戻り、去年の春から長野原町役場総務課に勤務、「広報ながのはら」の制作などを担当。趣味はキックボクシング、ロードバイク。「一度地元を離れてみると、この町の自然の豊かさにあらためて驚きます。僕だけでなくここでたくさんの出会いが生まれたら嬉しいです！」

特集・ここにしかない、夏。

稜線のその先に。

7月半ば。いつもは静かな高原の農村が「リゾート」と呼ばれる、短い夏がやってきた。

ひとけのなかった別荘地に灯りがともり、普段は軽トラックがのんびり行き交う国道に、県外ナンバーの車が目立ち始める。待ち兼ねたようにレストランやホテル、商店が活気を取り戻し、「夏季無休」の看板を掲げて大わらわ。

ただしこの賑わいも、年々勢いをなくしてきていると聞く。「昔はもっと賑やかだったんだけどねえ…」地元で商売をしている人は口を揃える。たしかに、夏が来てもシャッターが降りたままの店も、朽ち果てつつあるバンガローや山荘もあちこちにある。「高原の別天地へようこそ!」華々しい文句を謳った別荘分譲の看板は、錆びて傾いたままになっている。「遊びに来たけどなんにもなかった」と言って去って行く観光客もいる。

それでも。

北軽井沢のシンボルの浅間山も、草津や白根の峰々も、牛が草をはむ広大な草原も、鳥や昆虫が飛び交う雑木林も、何十回と夏が来ようと、変わらずここにある。その下で回る人間の暮らしにはお構いなしに、広い空は、入道雲を湧かせて夕立を降らせ、夜には満天の星を瞬かせる。この無頓着でおおらかな大自然こそ、北軽井沢の夏の本来の姿。何もないのではない。人の手が作れないものなら、こんなにも、余りあるほどある。

麓に暮らす者にとっては忙しく、あっという間に過ぎてしまう夏。時には、稜線の先に広がる夏空を見上げ、大きくひとつ深呼吸をしてみよう。

「関東平野の雲は浅間がつくる」という言い伝えを、誰かに教えてもらったことがあります。
天気は西から変わるものということもありますが、日本海側からの風が浅間連峰の気流とぶつかり、モクモクと雲が湧き上がったかと思えば東に流れていくドラマチックな夏空を見上げていると、あながち間違っていないのでは、と感心し、なんだか誇らしい気持ちになるのです。

最後の避暑地？

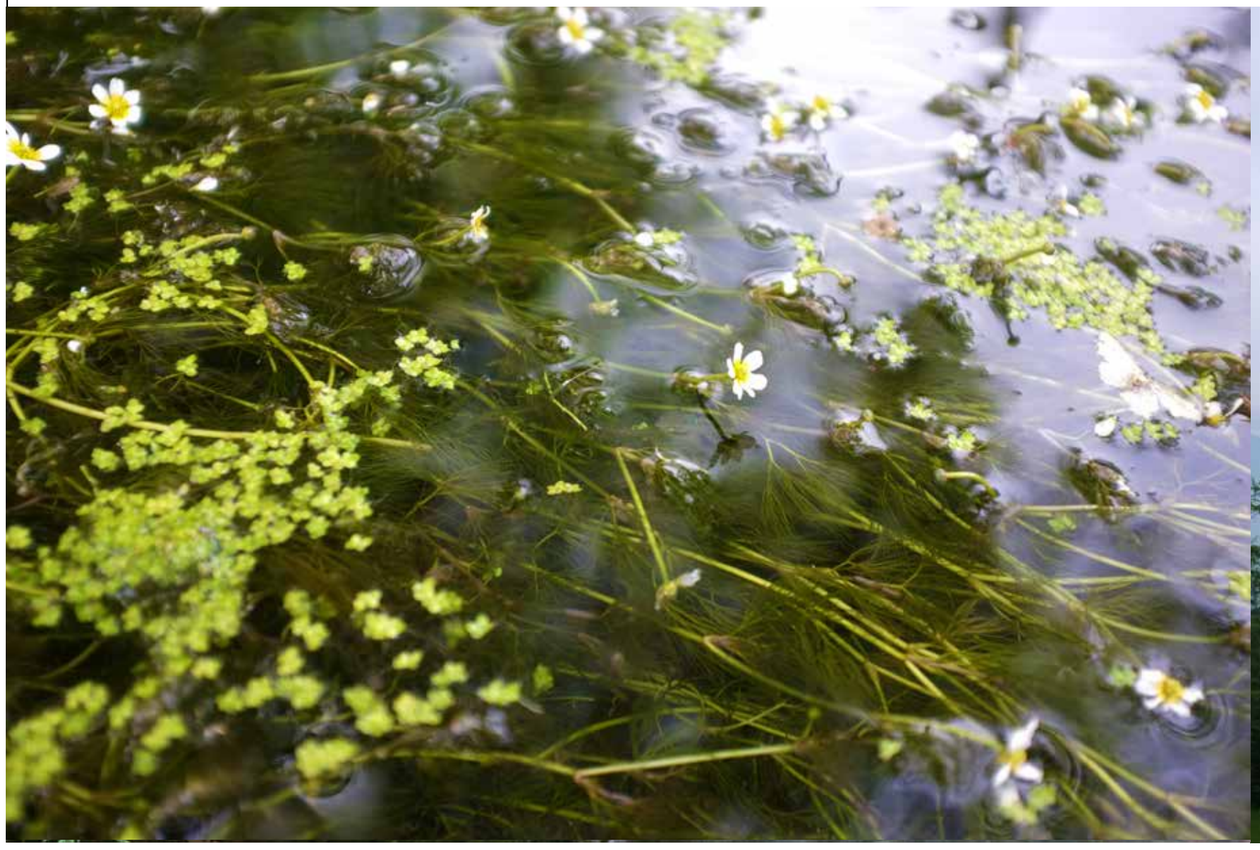
高原といえども、標高が高いだけに直射日光は強く、昼間は暑い。日向に10分もいればクラクラしてしまう。つい数日前までの梅雨冷え（北軽井沢では15℃を下回りストーブを焚くことも）とのギャップもあり、「暑い暑い、もう避暑地じゃない!」とバテバテになる。

けれどもこの発言。真夏に一度でも「下界」の街へ降りてみれば、たちまち撤回を余儀なくされる。30℃以上は当たり前という気温もさることながら、驚くのは身体にまとわりついてくるような湿度。まるで空気に粘り気があるのかと思うほど重たく、息苦しい。意識も朦朧と（誇張ではなく!）、這々の体で山へ帰れば、日陰や夕方の風はひんやり冷たく、途端に汗がひいていく。なによりカラリと乾いているので、身体が軽い。「ここで暑いだなんて騒いで、ごめんなさい。」山の向こうの彼方に向かって、謝るはめになる。

こんなことを言うと長野県のほうから石が飛んでくるかもしれないが、ここ数年は軽井沢ですら平地同様、暑い日もある。下から車で登ってくると、「万山望」を過ぎ、「峰の茶屋」を越えるあたりで、もわり、から、すっきり、へと、空気の膜が入れ替わる。あの瞬間がたまらない。同じように、高崎から来れば二度上峠で、上田から来れば嬬恋に入る鳥居峠で、目に見えない空気の層をまたぐ。ああ、これぞ北軽! やっぱり避暑地‼

嫌味と思われるかもしれないが、冬は氷点下の毎日に身も心も凍る日々。大きな顔ができるのは今だけなのだ。お許しいただきたい。

涼を感じるといえば、北軽井沢周辺には、浅間山系や浅間隠山系の水の湧く場所がいくつかあります。その水温は真夏でも 10℃以下。
夏の初め、狩宿付近の水源を訪ねてみると、冷涼な清流でしか育たない梅花藻が可憐な花を浮かべていました。
同じ浅間山から染み出る一滴の水も、南麓に出れば千曲川から日本海へ、北麓に出れば吾妻川・利根川を経て太平洋へ流れ込むと思うと、面白いものです。



特集・ここにしかない、夏。

森は生きている。

舗装された道を離れ、森に足を踏み入れる。

新緑の頃、明るい黄緑色に透けていた樹々の重なりも、8月に入れば鬱蒼と厚みを増す。かんかんに照りつけているはずの陽射しもここまでは届かず、ところどころわずかに水溜りのような光の円ができている。朝夕は賑やかな夏鳥も、午後の時間帯は静かだ。まさに「森閑」という言葉どおり。物音のしないひんやりとした森にしばらく一人でいると、時間の感覚がぼやけ、思考はだんだん切れ切れになっていく。大きなものに守られているような、そもそも自分など存在していないような。内と外との境界線が曖昧になっていく…。

浅間北麓一帯には、それほど深い森はない。厳しい気候環境と火山性の痩せた土地。直接の噴火の影響や、薪炭を必要とした時代の伐採などもあり、昭和初期頃の風景写真を見てもあたり一帯、草地に低木がぽつぽつ見えるだけ。けれどなかには、地蔵川沿いの「押切端」のように天明の噴火でも被害を受けず、数百年間、育ち続けている森もある。ミズナラ、コナラ、クリやカツラなどの広葉樹に、カラマツやツガといった針葉樹が混じり合う手つかずの雑木林。単一種が占める静かな深い森に較べて明るく、常に木々同士の競争が繰り広げられている。生き物の数も多く、そのためか目には見えないエネルギーに満ち溢れている。

長い一生のうちの「青春期」を生きる森と、私たちは今、たまたますぐ隣りで生きている。近くにありすぎて、当たり前のように見えているけれど、それは奇跡に近いことなのかもしれない。

北軽井沢の自然を愛し、ここに長年暮らした詩人・童話作家の岸田衿子さんと、画家・古矢一穂さん。
おふたりによる絵本『森のはるなつあきふゆ』の舞台は、"オシギッパ（押切端）の森"。四季の植物や生き物の移り変わりを通して、
浅間北麓の自然の豊かさ、またふたりの「この森がいつまでも守られ続けるように」との想いが綴られています。

帰りたくなる場所。

物心ついたときから、夏休みといえば北軽井沢に来ていた。（逆を言えば、北軽井沢以外の夏を知らない。）学校の終業式と同時に、車の屋根に大荷物を縛り付け、夜の間に移動する。朝が来て、雨戸を開けた瞬間、飛び込んで来る緑の濃い匂いと眩しい陽射し。「ここから夏が始まる！」あの胸がはちきれそうなわくわくした気持ちは、大人になった今でもはっきりと覚えている。

山荘に滞在中は、湖やプール、スーパーや商店で、地元の子どもとすれ違った。野菜を売る直売所では、手伝いをしている同い年くらいの男の子から、「ほら、うめーぞ」とトウモロコシを乱暴に手渡されてドギマギした。山荘の面倒を見てくれる大工さんや水道屋さんの子どもとも、お父さんが仕事をしている間、クワガタ穫りをして遊んだ。8月も半ばになると、彼らはひと足早く学校が始まる。こっちはまだ夏休みだもん、と優越感を覚えつつ、あの子たちは「ここからどこにも帰らなくていいんだ」と思うと羨ましかった。

「あの子たち」も、今は親になり、この村のどこかでしっかり働いているだろう。私のようにあの夏が忘れられずに移り住んでしまったり、夏になれば戻ってくる人たちもいるだろう。そして、それぞれの子どもたちがまたここで、ほんの一瞬、交差しながら、夏の思い出を胸に刻み続けていくだろう。

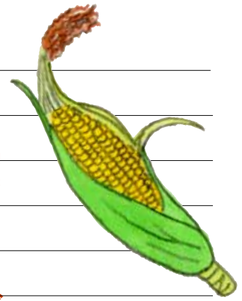
夏が来るたびにふと思う。この場所は大きく変わらなくたっていい。子どもたちにとって「帰りたくなる場所」でありさえすれば、それでいい。

とある取材中に出会った女の子。カメラマンとの「変顔」勝負にも、ご覧の表情で文句なしの一本勝ち。
「この子こそが北軽の宝じゃないか！」と惚れ込んでしまった編集部員たち。
あいにくお名前を聞きそびれ、ご本人の許可なく掲載させてもらったこと、どうかお許しいただきますよう！
いつまでも子どもたちのこんな素朴で無邪気な笑顔が絶えない北軽井沢であることを願いつつ。

「きたかる」生活絵本カレンダー 2016

「夏はお盆まで」とキタカリアンが言う通り、短い夏を思いきり楽しんだら8月下旬には秋の気配。9月下旬、ややピンクがかった赤に色づき始めるツタウルシを皮切りに、広葉樹の紅葉・黄葉、やがて落葉松の黄金色へ。浅間の頂上にうっすら雪がかかる頃には、麓までしっかり色づいた樹々が広がります。

8 August



月 1 **8月初旬**

火 2 メロン並みの糖度を誇る北軽産とうもろこし。８月に入ると日に日に甘さが増していき、8/8 ～ 8/11 あたりにピークを迎えます（年により前後）。皮が緑色でヨレてないもの、持った時にしっかりと重さを感じるものが新鮮。皮は調理直前まで付けておいた方が劣化を防げます。

水 3

木 4

金 5 **8月6日（土）**

土 6 **長野原町クラシック音楽の夕べ**

日 7 世界的クラリネット奏者ナイディック氏を迎え、ベートーヴェン 六重奏曲など名曲をお届けします。●場所：北軽井沢ミュージックホール　●開場 18:00 開演 18:30　●前売り 1000 円・当日 1200 円・高校生以下無料　●問合せ：北軽井沢ミュージックホールフェスティヴァル実行委員会（神倉）Tel.090-1696-1282 info@kitakaru-musichall.com

月 8

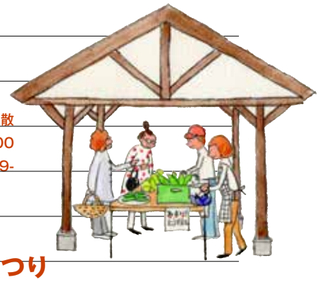
火 9

水 10

木 11 山の日

金 12 **8月7・21・28日（日）**

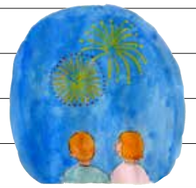
土 13 **きたかる朝市**



日 14 北軽井沢の採れたて野菜や牛乳・乳製品を販売。朝のお散歩ついでにどうぞ。●場所:北軽井沢駅舎前　●時間:6:00 ～ 10:00　●問合せ：北軽井沢じねんびと Tel.0279-84-6633

月 15

火 16



水 17 **8月 14 日（日）**

木 18 **北軽井沢高原まつり**

花火までの距離が近い！浅間鬼押太鼓や納涼踊りも見逃せません。雨天の場合は8月 16 日（火）に順延。●会場:北軽井沢ふれあい広場　●時間:16:30 ～ 20:00（花火打ち上げは 19:30 から）●問合せ：北軽井沢観光協会 Tel.0279-84-2047

金 19

土 20 **8月 20日（日）**

日 21 **前橋市立前橋高等学校吹奏楽部ミニコンサート**

数々の大会や式典で活躍する名門吹奏楽部の、さわやかな演奏をお楽しみに。●場所:北軽井沢ミュージックホール　●開場 14:30 開演 15:00　●入場無料　●問合せ：北軽井沢ミュージックホールフェスティヴァル実行委員会（神倉）090-1696-1282 info@kitakaru-musichall.com

月 22

火 23 **8月 27日（土）**

水 24 **移住フォーラム「きたかる移住計画」**

「高原リゾート地で『みらい』を拓こう」をテーマに長野原町が主催。トークセッションには我らが「きたかる」編集長も登場！●場所：北軽井沢小学校体育館　●時間：11:00 ～きたかるマルシェ 13:00 ～講演：イケダ ハヤト氏　14:00 ～トークセッション　●問合せ：長野原町役場企画政策課 Tel.0279-82-2244

木 25

金 26

土 27 **8月 28日（日）　東京マッハ vol.18**

日 28 **「想像の月まぶしくて目をあける」**

俳句を持ち寄り、人気投票を経て、作者を伏せた状態で批評する公開句会「東京マッハ」を北軽井沢で開催。前売り完売ですが、当日晴れの見込みなら前日に当日券を追加販売予定。●場所：ルオムの森　●出演者：谷川俊太郎・米光一成・長嶋有・堀本裕樹・千野帽子　●問合せ：http://kitakarumach.peatix.com より

月 29

火 30

水 31

9 September

木 1 **８月末から９月**

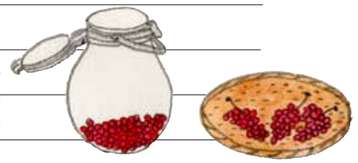
金 2 **渡り蝶・アサギマダラの滞在**

土 3 海を越えて 2000km も旅すると言われる蝶、アサギマダラが上昇気流に乗って浅間山麓にやってくる頃。その生態はまだまだ謎に包まれていますが、北軽周辺では特に鹿沢のスキー場のとある斜面にたくさん集まる、という説も。その名のとおり美しい浅葱色の羽をふわりふわりと動かして舞う姿は、なんとも優雅なのです。

日 4

月 5

火 6 **９月中旬　果実酒作り**



水 7 秋の夜長は自家製果実酒で楽しみましょう。五味子はウォッカ漬けに。キウイのようなサルナシは氷砂糖と一緒にホワイトリカーに漬け込んで保管。山ぶどうは房ごとつぶし、フタをゆるめに閉めた保存容器に入れて、２週間ほど置いておけばOK。

木 8

金 9

土 10 **9月22日（祝）**

日 11 **「きたかる」主催『自然ガイドの坂岡さんと、ぶらぶら森を歩く会』**

「嬬恋軽井沢自然倶楽部」副会長、浅間山麓を中心に活動している自然ガイドの坂岡さん。今回は北軽井沢から車で 1 時間弱、坂岡さんおすすめスポットの池の平湿原をガイドします。さまざまな初秋の花が咲く見どころいっぱいの池の平へ、遠足気分で出かけませんか。●参加費：５００円（保険料含む）※駐車場は別途５００円かかります●時間：10:00 ～ 13:00（現地集合・現地解散）●持ち物：お弁当・飲み物　●定員：10 名　●お申込み・問合わせ：「きたかる」ホームページより

月 12

火 13

水 14

木 15

金 16 **9月下旬**

土 17 **秋まつり（9/22 桜岩地蔵尊・9/28 牧宮神社）**

天明の噴火で焼け野原のようになってしまった六里ヶ原一帯。目印もなく、難儀する旅人を見て、村の有志が道しるべとなるお地蔵さまをたてました。それが桜岩地蔵尊です。北軽井沢開発の祖であり発展の父、北白川宮能久親王を祭っているのが牧宮神社。春と秋にささやかなお祭りをしています。

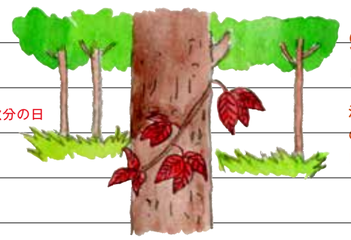
日 18

月 19 敬老の日

火 20

水 21 **９月下旬**

木 22 秋分の日 **ウルシの紅葉始まる**



浅間高原で真っ先に赤くなるツタウルシ。まだ緑の森の中でひときわ目立ち、目を奪われます。あまりの美しさにうっかり近寄ると、かぶれるので注意！

金 23

土 24

日 25 **8・9・10月の毎週末**

月 26 **「きたかる」主催**

火 27 **好評につき、『森の写真館』による**

水 28 **今度は紅葉の中での記念写真！**

森の中では、不思議と自然に笑顔になります。そんな素敵な一瞬をパシャ！ 写真家・田淵章三＆三菜さんによる「森の写真館」が、家族の、個人の、大切な一枚を撮影します。●場所／ルオムの森● A4 プリント／５カット／ 5,000 円／データ添付●お申込み・問合せ：「きたかる」ホームページまたは 080-6534-5437 ／ 090-6482-1484 まで

木 29

金 30

10 October

土 1 **10月１日（土）２日（日）**

日 2 **北軽井沢の杜 クラフトフェア**

長野原町･嬬恋村･軽井沢を中心に活動中のアーティストが集うフェア。木、陶磁器、布、ガラス、金属、革などで作る雑貨や家具・オブジェなど、温もりあふれる作品がいっぱい。作家から直に教えてもらえるワークショップも。雨天決行･入場無料。●場所：浅間ハイランドパーク ポート池周辺　●時間：１日（土）10:00 ～ 16:30・２日（日）10:00 ～ 16:00　●問合せ：クラフトフェア実行委員会事務局【準備期間中】03-3379-1131【開催日当日】0279-84-3333

月 3

火 4

水 5

木 6 **10月初旬　花豆の収穫**

金 7 大きい！おいしい！と絶賛される北軽井沢名産の花豆。標高 1000m 以上の冷涼な地域で実をつけます。その収穫は 10 月初旬から始まります。霜が降りると、霜が乾く時に豆の水分が蒸発していい状態の豆が取れるから、とのこと。新豆として出回るのは 12 月に入ってから。待ち遠しいですね。

土 8 体育の日

日 9

月 10

火 11 **10月上～中旬　山栗拾いの時期**

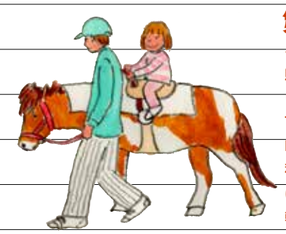
どんぐりに続き、10 月になると山栗が落ちてくるようになります。実は親指の先ぐらい小さくても、味の濃い山栗。おいしさを知っているのはヒトだけではないので、動物・虫との取り合い！

水 12

木 13

金 14 **10月 10 日（祝）**

土 15 **第 7 回 北軽井沢わくわくフェスタ**



日 16 キタカル住民による住民のためのお祭り！ステージ発表、物販、体験コーナーなど盛りだくさん。●場所：北軽井沢グラウンド周辺 ●問合せ：わくわくフェスタ実行委員会（真下）Tel.090-2484-3518

月 17 BOOK-NiCK（ブックニック）in 北軽井沢

火 18 秋の森でピクニック気分で楽しむ古本市。県内外の古本屋のほか、骨董屋、クラフト作家などが集まります。●場所：北軽井沢ミュージックホール ●問合せ：麦小舎 http://www.mugikoya.com

水 19

木 20 **10月21 日（金）**

金 21 **カフェドフルミエール主催『フルーツ酵素シロップをみんなでつくる会』**

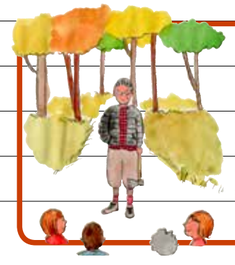
土 22

日 23 フルミエール提携農家から届く旬のフルーツを使って酵素シロップを仕込みます。パティシエがみなさんに作り方のコツをお教えします。主役のシロップはご自宅に帰った皆様プラス酵素の力でできあがります！ぜひご参加ください。●時間：13:00 ～　●参加費：2500 円（漬物樽 5 型以上持参の方は 500 円引き）●定員：10 名　●持ち物：エプロンのみ　●問合せ：カフェドフルミエール TEL 0279-82-1181

月 24

火 25

水 26



木 27 **緊急予告＆スタッフ・モデル募集！**

金 28 **11月上旬「きたかる」主催**

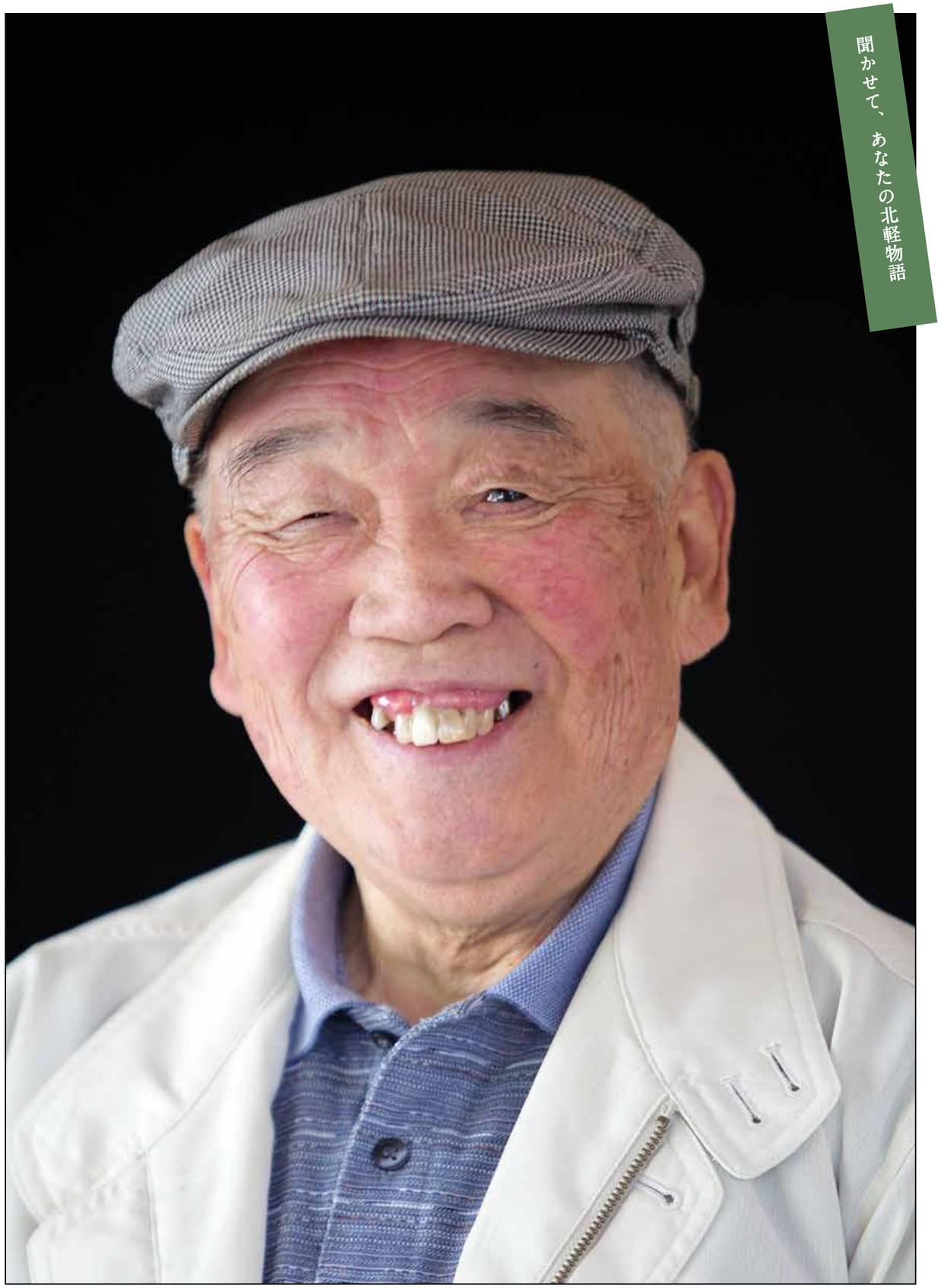
土 29 **森でファッションショー開催**

日 30 本格的な冬がやってくる頃、ここが北軽井沢のおしゃれ好きの腕の見せ所！あったかくてかわいい or カッコいいスタイルを、一緒に探しませんか。●モデル・スタッフ募集：自薦・他薦を問いません。●応募・問合せ：ルオムの森 Tel.0279-84-1733

月 31

※各イベントの詳細・その他のお知らせは、「きたかる」のホームページ　kitakaru.me　をご覧ください。
※四季を通じて生活絵本カレンダーへの情報募集中！

イラストレーション／加藤彩子



どうして駅舎のためにそこまでって？ここを潰したくなかったからね。私のライフワークだから。

（黒岩謙さん・82歳）

オレンジ色の入母屋造の屋根に、白い格子の窓。独特の和洋折衷感とともに高原の鉄道駅の面影を残している旧草軽鉄道「北軽井沢駅」。およそ22あった駅のうち、当時の姿が現存されている唯一の駅舎です。

大正初めの開通当初の名称は「地蔵川停留所」。昭和4年、法政大学村の開村に伴い、大学村が駅舎を新築し草軽電鉄に寄付、名称も「北軽井沢駅」へ。廃線後は、ある数奇な運命を辿り、平成18年には国の「有形文化財」に登録。今、構内は一般開放され、誰でも自由に見学ができます。

他の駅同様、朽ち果てていく運命にあった駅舎が残されたのはなぜでしょう？　その鍵を握るひとりの元「ぽっぽや」さんに、かつての職場である駅員室でお話を聞きました。

中学を卒業して2年目に草軽交通に入社しました。それから昭和35年4月25日に北軽井沢駅が廃止になるまで、駅員としては9年間。仕事は楽しかったですよ、家庭的な雰囲気だったからね。駅長とほかに3人。タブレットの操作から、出札、荷物預かりまでなんでもやりましたよ。

タブレットってわかる？ここ（ホームに面した一画）に機械が2台あってね。たとえば栗平のほうから列車が来ますね、そうすると向こうの駅からの合図でボンボンボンって鳴る。お互いに電気を送り合うと中から赤銅の玉（※円盤状＝タブレット）がガチャンと出るんです。その玉を列車の運転手さんに持たせないと、次の区間に進めない。つまり、単線でしょ、間違って列車が重ならないようにするための衝突防止です。駅と駅の間でそれぞれ玉が違うから、間違って入れようとしても入らない。当時の単線の鉄道では、タブレットはよく使われていましたよ。

手荷物はね、チッキ1枚で目方はとわず3個まで100円。通常はお客さんと手荷物が一緒に来るんだけど、軽井沢で積み直したりするでしょ、そうすると荷物が一本遅くなって。それでもお客さんはここでのんびり待ってましたね。あの頃は駅員室から大学村に続く一本道が遠くまでよく見えて、向こうから列車に乗ろうと走って来る人が見えたら、出発を少し遅らせたりしてね。

夏はとにかく大忙しで休みなし。客車を増やしたり、北軽井沢までの臨時列車も増便されて。「あさま」や「しらかば」ってサマーカー（オープンタイプの客車）も人気だったね。大学村で降りる人のための「湯沢」という夏だけの降車場もありました。冬は、雪かき。ポイントが雪で動かなくなるから、各駅間はそれぞれの駅の責任で除雪する。三原のほうが勾配が急だし雪も多くて大変だから、応援に行ったりもしたね。

駅が廃止になって数年でボロボロになってきて、これは潰れちゃうなと。草軽の本社に行って「貸してくれ」と言ったら、貸すには貸すけどお金は出してやれないって。だから自腹で直しました。壁は布張りにして、本体には傷をつけないようにして。何百万もかけて、きっと夜逃げするよっていう人もいましたけどね（笑）。もう10年遅かったらダメだっただろうね。昭和47年の4月から平成13年の10月まで、29年と7ヶ月。スナック「麗峰」をやりました。昼間はコーヒーも出して。喫茶店もスナックも北軽井沢第1号です。店をやめるときには、長野原町に買ってもらえるよう本社との間を取り持って。最後まで面倒みれてよかったですね。なんでそこまでって？とにかくここを潰したくなかったから。私のライフワークだからね。

昭和9年、宮城県仙台市生まれ。小さい頃の遊び場は伊達政宗の霊廟の裏庭だった。戦争で焼け出され、父親の実家が三原にあったため家族で北軽井沢へ。趣味はゴルフ。だが奥様が亡くなってからはぴたりとやめた。「女房も（ゴルフが）大好きだったから。俺だけ楽しんでちゃ悪いじゃない」

蹴られたってへっちゃら！牛と大自然に見守られ、まっすぐ、すくすく。

5月14日。北軽井沢ふれあい広場に勢揃いした数十頭のホルスタイン。いずれも堂々とした風格で、毛並みはツヤツヤ輝いています。

この日は、北軽井沢をはじめ県内各地の酪農家から選りすぐりの乳牛が集められ、体型や資質を競う品評会、「北軽井沢スプリングショウ（共進会）」の開催日。北軽井沢の大会は全国的に見ても歴史が古く、昭和49年に創設されて以来、今年で41回目。毎年多くの優秀な乳牛を輩出してきました。

草を食みながらおっとりと出番を待つ牛たちのまわりを元気に走り回っていたのは、大屋原の「萩原牧場」の萩原健心くん（7歳）、璃子ちゃん（5歳）、大晴くん（2歳）。お母さんの奈津美さんによれば、3兄妹はふだんから餌やりなどをよく手伝ってくれるのだとか。「特に璃子は小さい頃から牛に蹴られて泣いてもまたすぐに近づいていって。大好きなんです。お兄ちゃんのほうが今はちょっと怖がりかな。でもうちの主人も小さい時はビビってたみたいだから、わからないですよね！」

子供たちも遊んでばかりではありません。子供がリードマンを務めるベビーショウ部門に登場し、堂々とした手綱さばきが評価された璃子ちゃんが見事優勝！　2代目から3代目、さらには未来の4代目へ。北軽井沢の酪農は、のびのびと着実に受け継がれようとしています。

北軽あるある

初めて訪れる人からしたら「なんじゃそら」な、北軽井沢ならではの常識。
1,000ｍを超す標高と、北斜面であることが合わさって、
関東地方にあるとは思えない涼しさをつくりだす。
春は遅く、秋は早く、冬は長い北軽井沢において、
唯一、誰もが羨む快適さをここに自慢する。

８月から１０月にかけての「あるある～自慢の涼しさ～」

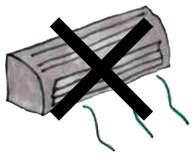
巷では毎日熱射病で運ばれた人の数が報告される季節。
灼熱の日差し、まとわりつく湿気、連日の熱帯夜。
でも北軽は…

「あるある１」
カキ氷が売れない。
（寒くなる）

「あるある２」
窓を開け放したまま寝ると風邪を引く。しかも夏でも布団を掛けて寝る。
（毛布はなくてもよい）

「あるある３」
残暑が分からない。（立秋（８月８日頃）を境に、朝晩の涼しさが増す）

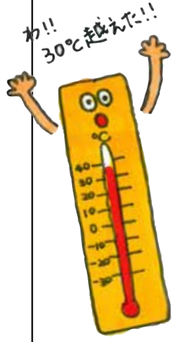
「あるある４」
いつだって羽織りもの必須。
（ノースリーブの出番がない）



「あるある５」
キタカリアンは熱帯夜を知らない。

「あるある６」
クーラー不要。そもそも、クーラーを持っている家をほとんど見ない。

「あるある７」
地元っ子は屋外プールを知らない。（冷たくて無理）



「あるある８」
毎日のようにやってくる夕立。チビりそうなほど激しい雷雨の後は「フリース持ってて よかったね」となるほど気温が落ちることもしばしば。

「あるある９」
今日は日中30度まで上がったとはしゃぐキタカリアン。（30度超えがレア）

「あるある 10」
軽井沢なんて暑すぎて行きたくない。
（ここは「北軽井沢」）

「あるある 11」
ゴキブリって何？（北軽では越冬できないため見かけない）

イラストレーション／NANA

「きたかる建物応援団」がゆく！

〈第二回〉大屋原の酪農の家

絵・文　伊郷吉信

「自由建築研究所」代表。協同組合「伝統技法研究会」副理事。NPO「あさま北軽スタイル」理事。設計活動とともに、建物保存活用のためのアドバイス、調査、研究を行なう。「こぶしの家移築プロジェクト」「狩宿茶屋本陣調査」等、北軽井沢・長野原町とも縁が深い。

軽石ブロック住居との出会い

北軽井沢から大学村を抜け、北に走ると、長閑な牧草地が広がってくる。北軽井沢の風景だ。マンサード（腰折れ）屋根の牛舎や飼料の貯蔵庫である塔型のサイロが点在する。この地域が満州開拓から帰国した人たちが戦後入植したことはかねてから聞いていた。今回は、そんな昔のことを取材したり、ブロック建築のルーツを辿ろうと簡単に考えていた。まずは大屋原にある酪農農家の永井つるさん（昭和6年生）の家に行き話を伺った。

亡き御主人永井鎌二さんは、かつて北軽農業協同組合長をなさっていた。鎌二さんがこの地に入植するのは昭和24年のこと、満州駅馬開拓団に属していたがシベリアに3年間抑留され、何とか引き上げて来た。山林だった土地の唐松を倒し、抜根し土地を切り開いた。熊笹（隈笹）の多い地域で入植期の家は、屋根、壁を笹で葺いた笹小屋だったという。え！笹小屋！・・・。極寒のこの地で、雪が舞い込むような小屋だったという・・・。丹後地方に笹葺き屋根があることは聞いていたがこの地で葺いていたとは！

入植すると、まず水路を引いた。電気はまだ点かない。つるさんが中之条から嫁いだのは昭和29年。新婚の住まいはブロック造だった。土間と2間があるだけの極めて単純な間取りであった。畳があったがおそらくつるさんを嫁に迎えるために敷かれたと回想する。他の家は筵だった。おそらくこの地でブロック住居の出現は、昭和27年から昭和28年くらいだろう。セメントに軽石を入れたブロックを青年隊がつくったという。窓は木製で二重だった。

ブロック住居が、まだ北軽井沢に残っているかとの問いに「成田さんとこぐらいかな」との答えが返ってきた。

早速、成田家を探すことになった。その家は通称十字路の付近にすぐ見つかった。思わず感激の涙！つるさんに聞いた話はすべて目の前にあった。庭にいた成田たけさんと会い、無理を言って中まで見せていただいた。内装はブロックむき出し、4畳半と6畳に土間があるのみ。また、屋根はセメント瓦、小屋組はキングポストトラス。建物は時代を語る。苦しみも喜びもこの家に見ることが出来た。手製の軽石ブロック一つ一つに触り感謝したい気持ちに駆られた。

（満州から帰りこの地を第三の故郷とした人たちの話をするには紙幅が足りません。またの機会に。永井つるさん、成田たけさんありがとうございました。）

よるべ「ある」夜

―――― 長嶋 有

北軽井沢といえばセーブオンだ。「セーブオンのところで曲がって」と、地元に暮らす誰もが人にそう教える、目印のような店だ。「北軽井沢交差点」にずっとある。あるというか、あってくれているといいたい。コンビニエンスストアは誰にとっても身近なものだろうが、田舎となると意味合いがいっそう切実になる。

父の山荘が北軽井沢の森の中にあり、毎夏を過ごす。九月になると父一家は下山するが、僕は一人で粘る。虫だらけ、雨漏りのする徹くさい小屋で、ただ東京の猛暑を避けたいからというだけで、一人きりでだらだら過ごす。

免許をもたなかったころは、買い出しは徒歩三十分、往復一時間かけた。セーブオン往復だけがその日の運動だ。たまに友人がきていて、ビールの買い置きがなくなると手に手にマグライトを持ってセーブオンまで歩く。真っ暗な森の道を踏みしめ、広い畑を巻いて、無人の小学校のグラウンドを眺めてまた森を進み、やっと舗装された道に出ると、たしかに蛍光灯で構成された明かりがそこにだけ灯っている。ほか、雑誌やビールやスナックをどこで買うこともできない。小さいがたしかな「寄る辺」だ。

入り口には「九月いっぱいは24時間営業！」と貼られている。元気なゴシック体で書かれているが、その紙でいつも一瞬、北軽井沢の厳しい冬に思い致す。24時間ではないが、冬期休業もしない。ただ寂れていくのでない土地の力がコンビニに感じられ、敬虔な心持ちが沸き上がる。

数年前、隣にセブン－イレブンが開業した際、セーブオンはわざわざ駐車場と土地を広げ、大きな店に建て替えた。ひところは小さなセーブオンの背後に建設中の大きなセーブオンが並ぶおかしな絵面だった。虫の脱皮のようだ！　ライバルに負けまいという気持ちが露骨に示され（すぎ）ていて、ぐっときた。今は二店舗仲良く（ないかもしれないが）並び、コーヒーやからあげ棒なんかで張り合って、元気な感じを増している。

長嶋 有（Yu Nagashima）
1972年生まれ。2001年「サイドカーに犬」で文學界新人賞を受賞してデビュー。翌年「猛スピードで母は」で芥川賞受賞。07年「夕子ちゃんの近道」で第一回大江健三郎賞受賞。著書に、北軽井沢を舞台にした「ジャージの二人」、「ねたあとに」ほか多数。近著に、15年「愛のようだ」（リトルモア）、16年「三の隣は五号室」（中央公論新社）。ブルボン小林として、漫画評論家、コラムニストとしても活躍。大学村に祖母の代からの山荘があり、毎夏を過ごす。今年8月、主宰する公開句会イベント「東京マッハ」を北軽井沢にて開催（※詳細は「生活絵本カレンダー」ページ参照）

編集後記

スーパークールビズの冷房設定で、中途半端に蒸した都心の会議室。ふとその朝出かける時に感じた北軽の風の香りを思い出し、呆然としてしまう。そう、東京で想う北軽は遥かな異国。無機質なくせにどこかギトギトした混沌の街を抜け、さらに肥沃な田園地帯を越えた先にある、雲上の国。「山のあなたの空遠く」じゃないけど、偉大な山の女神が治める幸福の国なのだ…威厳とエレガンスに満ちた浅間の姿をうっとりと思い浮かべると、急に目の前の会議なんかどーでもよくなって生返事してヒンシュクを買ってしまう。ゴメンなさい、私はまだまだ「風の人」です。（A）

ひと言で言い表すことができない。この誌面で何を伝えていったらいいのだろう…。仲間とも何度も意見を交わすうち、ある一人がこう言った。「わからないこと、うまく言い表せないことを、見つけていくための冊子にすればいい」のだと。そう、だからこの『きたかる』は、私たち作る側が、読む人と一緒の目線で地べたに座り込み、土地に埋もれる宝をひとつひとつ掘り起こしていく「発掘作業」のようなもの。

わからないなりに確信していることもある。それはこの北軽という場所が、もともとここに暮らす「地の人」と、この場所が好きで繰り返し訪れる「風の人」、双方の「人」の力によって、他にはない独自の「風土」を作り上げているということ。今号でも、世代を超えて受け継がれる狩猟文化、浅間を愛し研究を続ける人、ひとつの時代を支え続けてきた店、未来に向かって奏で合う子どもたちなど、それぞれの「人」の北軽への自負や愛着を肌で感じることができた。（ご協力いただいた皆様、ありがとうございます！）

これからも「地の人」と「風の人」の間をくるくると舞う〝つむじ風〟のように、体当たりで宝探しを楽しんでいきたい。皆さんにも面白がってもらって「まだまだこんなお宝があるよ」と耳打ちしてもらえたら、これ幸い！（F）

きたかる vol.5
２０１６年７月発行
企画・編集・制作／きたかる編集部
［編集長］藤野麻子［編集］AKIKO・福嶋悠貴　［写真］田淵章三・田淵三菜（森の写真館）［デザイン］田淵章三［WEB 制作］G+G
発行／北軽井沢じねんびと
印刷／上毛新聞 TRサービス
※この冊子は長野原町の助成を受けて発行しています。

お問合せ：きたかる編集部
メールアドレス：info@kitakaru.me
住所：〒377-1412 群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢 1924-1360
「きたかる」へのご意見・ご感想をお寄せください。

「きたかる」ホームページ　http://kitakaru.me
北軽井沢の季節の風景、イベント、取材こぼれ話など、WEB 版も更新しています。

※本誌掲載の写真・文章を無断で複写・複製・転載することを禁じます。